ＵＤＬについてのご質問へのバーンズ先生と川俣先生による回答

**○UDL実践のためには、「的確な実態把握」が欠かせません。しかし、授業を進めるのと同時に**

**子どもたちの様子を見て、的確に実態把握をするのは困難です。どうすれば良いでしょうか？**

→実態把握というと大がかりなものを想像するかもしれませんが，児童の授業中の様子や提出されたプリント，テストの結果など日常実施していることでも，そこから推測することによって児童の学びの実態を把握することが可能です。

　また，形成的評価を積極的に実施することも大切です。形成的評価とは，成績をつけるために実施する評価（総括的評価）ではなく，子どもたちが今までの授業内容をどれくらい理解しているかを教員が把握するために実施するものです。形成的評価を実施する際のポイントは以下の通りです。

* これまでやった内容について，どれくらい理解できているかを子どもに確認する。口頭，書面，自己チェックなどの方法でも可能。
* 例えば授業終了時に，その日の理解度を尋ねるのも形成的評価の１つである。ただし，わからないことを正直に言えるように，こちらが配慮しなければならない。
* 成績をつけるものではない。また子どもにもそれを伝える。
* クラス全体の状況を把握するのならば，無記名でも構わない。
* 最後ではなくて，授業や単元の途中で適宜実施する
* 形成的評価によってわかることは，子どもたちのそこまでの理解度である。そして子どもたちの理解度は，自分の教え方がよかったかどうかを示していると考える。
* 形成的評価を実施することにより，総括的評価も向上する。

これらの取り組みを通して，必要に応じた実態把握をしていきます。

**○実践を既に行っているが、授業構想、教材準備に時間がかかりすぎます。どうすれば良いでしょうか？**

→確かに始めたばかりの時は準備に多く時間がかかるかもしれませんが（そして用意したものを子どもたちが自由に使えるようになるのにも時間が必要なわけですが），取り組むにつれて様々な教材，知識，機器の使い方が蓄積されていくので，準備にかかる時間は短縮できるはずです。その他にも，教員間で共有，蓄積していくことが大切です。自分の作ったもの，他の先生が作ったもの，使った機器の便利な使用方法，こうしたものを校内研究部でまとめて利用可能にしておくと，準備の時間を短縮できるかもしれません。

→授業構想について考える際には，「この１時間をどういう流れで授業するか」ということではなく，「これを教える際に子どもはどこでつまずきそうか」という視点で考えてみると良いかと思います。指導案を作るのではなく，つまずきそうなところ（学びのバリア）を探す，そういう視点から考えてみると開けてくるかもしれません。

**○UDLの授業で、子どもたちが意欲的に学べることは理解できました。**

**ただ、多様な学びを提供した場合、公平に評価することが難しいのではないでしょうか？**

→ＵＤＬについての質問の多くは評価に関するものです。まず、そもそも「公平な評価」とは何でしょうか？多様な学びを提供することは，ひいきをしたり公平さを失わせることではありません。学ぶ方法が他の人と異なっていたり，他の人より多くの方法を用いることは，けっして評価を下げることにはつながりません。UDLについてWebサイトだけ見て理解した人と，研修を受けて本を読んでWebサイトを見て理解した人では，Webサイトだけ見て理解した人の方が優れた評価でしょうか？

→例えば、九九を覚えてテストをするときに「何も見ないで記述式の掛け算テストに解答した子ども」と「何も見ないで口頭で九九が言えたが，記述式には取り組めなかった子」と「九九表をみながら解答できた子ども」の評価を一緒にして良いのか，という場合だとしましょう。もしこのカリキュラムの目標が「九九を書けること」であるならば，それはそもそもその評価基準自体を見直さなくてはならないと思います（九九を一桁の掛け算に応用できるものだと理解できていることと，書くことは無関係なのでここでは書けるかどうかというのはカリキュラムの障害になり得ます）。また、唱える九九を使わず、たとえば視覚的に九九表を覚えて一桁の掛け算を自動化させている子もいます。「さぶろく、じゅうはち」と声に出して言わなくても、その子の方法で自動化しており、計算ができればいいわけです。「九九を暗記している（つまり一桁の掛け算が自動化している）」がゴールだとすると，見ながら解答できた子どもについてはまだゴールまで到達していないことになるので，見ないでできるようになるためにどんな方法を用意できるか、また「九九」として唱えて覚える以外の方法についても検討しなくてはなりません。もし能力的に掛け算をすることが難しい子どもならば，その場合には個別の指導計画を作成してその子どもに合ったゴールを設定する，ということになります。いずれにしても，学習のゴールが定まっていれば、それに沿って評価ができますので、公平な評価ができないということはないかと思います。

**○授業で多様な表出ができたとしても、定期テストも、高校、大学入試も結局はペーパーテストが中心です。そこのギャップをどう考えれば良いでしょうか。**

→おそらく今後は指導要領の改訂や高等教育改革に見られるように，ペーパーテストで既知の事柄の量を競う入試は徐々に減っていくと思われます。そして，逆に考えればペーパーテストがどうしても必要になるのはご指摘の期間でいえば6歳から25歳ぐらいまでですね。残りの50年間は，自分で自分の学びをマネジメントしていかなくてはなりませんし，そのためには学校のある期間中に様々な表出方法を試し，そして自分に合った一番力の発揮できる方法を学ばなくてはならない。「将来にわたり学び続ける子どもを育てる」ためにも、このことは重要であると考えられます。また近年では，入試の際に合理的配慮を求めることも可能となってきています。入試のためにペーパーテストの対策をすることはもちろん求められますが，だからといってそれに対応できない子どもが学びから排除されることはあってはならないことと思います。

**○「どこまで支援すればよいのか」「選択制にすることで、全ての子どもたちの学び合う、教えあう機会を奪うことにならないか」「グループ活動の際にどのような実践方法があるか」を知りたいです。**

→どこまで支援すればよいか，ということに対しては教えるゴールに達成できるまで教える，というのが答えとなります。グループ活動の実践法については，特にUDL独自の方法はありませんが，全員一律にグループ活動をするのではなく，グループでも個人でも活動可能にする，グループで活動するとき個人で活動するときが順番に回ってくるようにする（あるグループが先生とグループワークしているときには，他の子どもたちは自分の課題を自分で設定して活動して待っている，のようなイメージです）など，あくまでもグループ活動はオプションの1つであることが，UDLにおけるグループ活動です。

→選択制にすることで，子どもの学び合う機会を奪わないか，という問いに対しては「その授業の狙いは何か」ということを明確にすることが必要です。その授業の狙いが，「全ての子どもたちの学び合う、教えあうことを経験する」あるいは「全ての子どもたちの学び合う、教えあうための方法を学ぶ」であるとするならば，皆で一斉にグループ活動することはその授業の目的に合っています（ただし，当然出来ない子もいますので，そこでは皆が一斉にグループ活動するために必要なオプションの事前準備が必要になります）。しかし，「7の段を覚える」が目標ならば，そこでは全ての子どもたちの学び合う、教えあうことは目的ではないので，無理に全員グループ活動することは，かえってカリキュラムの障害になりかねません。「7の段を覚える際に，全ての子どもたちが学び合う、教えあうことを経験する」が目標だとすると，それは同時に2つ以上のことを求めるという高い目標が，子どもたちの取り組みを考える上で，カリキュラムの障害になってきてしまいます。繰り返しになりますが，「何を学ぶのか」という目的に応じて，オプションは考えていくことが重要だと思います。

**○UDLの研究者はconstructivist の考え方をどのように整理しているのですか？**

→ロックやカント，ヴィトゲンシュタイン，ピアジェのような心理学的構成主義の立場，デューイ，ヴィゴツキー，コール，ワーチからエンゲストロームに代表される活動理論やCHATの流れ，そしていわゆる教育工学への応用などその裾野が広く，お尋ねの趣旨がいまひとつよくわかりません。不勉強で申し訳ありません。

→UDLが主によりどころとしているのは，神経心理学・脳科学です。いかに脳に無理のない，個人の脳の特徴にあった学び方を実現するか，というのがUDLのベースとなります。CASTのWebサイトには様々な情報が掲載されていますので，ぜひご参照ください。

http://www.cast.org/

**○地学分野における「時間や空間」のスケールの提示方法として、地学等の先進国であるアメリカでは、どのように提示しているかを知りたいです。**

→CAST UDL STUDIOというWebサイトには様々な実践例が掲載されていますので，一度参照されると良いかと思います。ほかにも上記のCASTのWebサイトにもヒントがたくさんありますので，ぜひご覧になってみてください（google翻訳・weblio・英辞郎 on the WebなどのWeb辞書，あるいは英語を得意な人を頼りに頑張ってみてください）。残念ながら日本語での提供はまだありませんので，これから皆で協力して実践を蓄積していきましょう。

http://udlstudio.cast.org/